

八尾南遺跡 (第15次調査)

現地説明会資料



弥生時代前期河道出土土器 (S = 1 / 4)

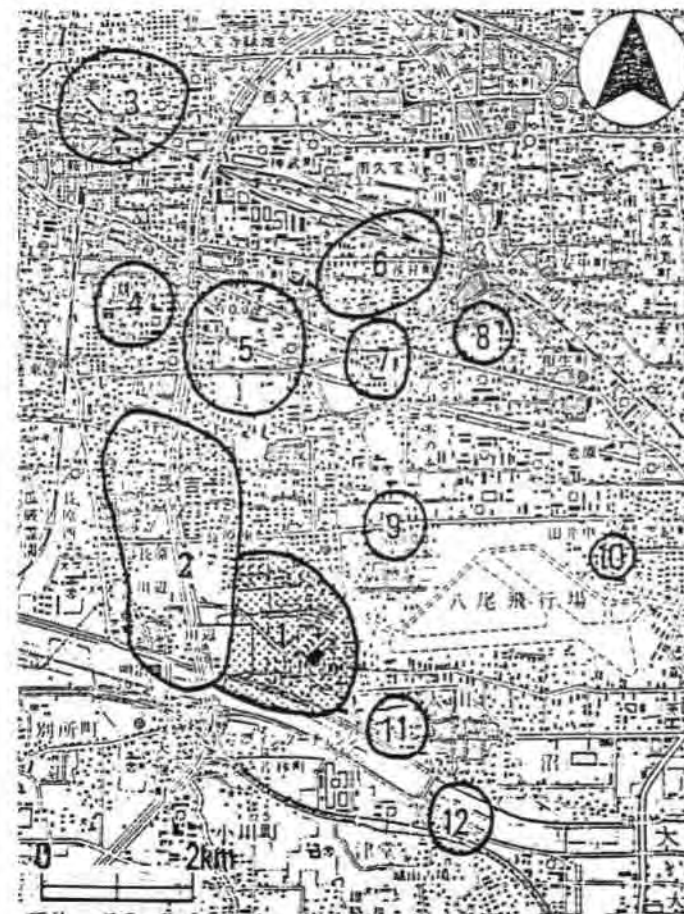
平成2年2月10日 (土)

(財)八尾市文化財調査研究会

1 はじめに

八尾南遺跡は、八尾市若林町から西木の本にかけての地域に所在する遺跡です。西隣りの大阪市側に位置する長原遺跡とは、行政区域が違うために遺跡の名前こそ違っていますが、ほぼ同じ遺跡であると考えられています。地理的には、南方より伸びる羽曳野丘陵の末端にあたる場所に位置しています。これまでに(財)八尾市文化財調査研究会の15次にわたる調査のほか、八尾市教育委員会や大阪府教育委員会による発掘調査もおこなわれており、後期旧石器時代(約20000年前)～鎌倉時代(約550～700年前)の複合遺跡として知られています。

今回の発掘調査は、(株)三起商行の社屋建設に伴い、平成元年11月6日より同2年2月9日まで実施しました(調査面積864㎡)。その結果、多くの成果を得ることができましたので、現地説明会を実施することになりました。



周辺の遺跡分布図

<周辺の遺跡>

1. 八尾南遺跡
2. 長原遺跡
3. 加美遺跡
4. 竹洲遺跡
5. 亀井遺跡
6. 跡部遺跡
7. 太子堂遺跡
8. 植松遺跡
9. 木の本遺跡
10. 田井中遺跡
11. 太田遺跡
12. 大正橋遺跡

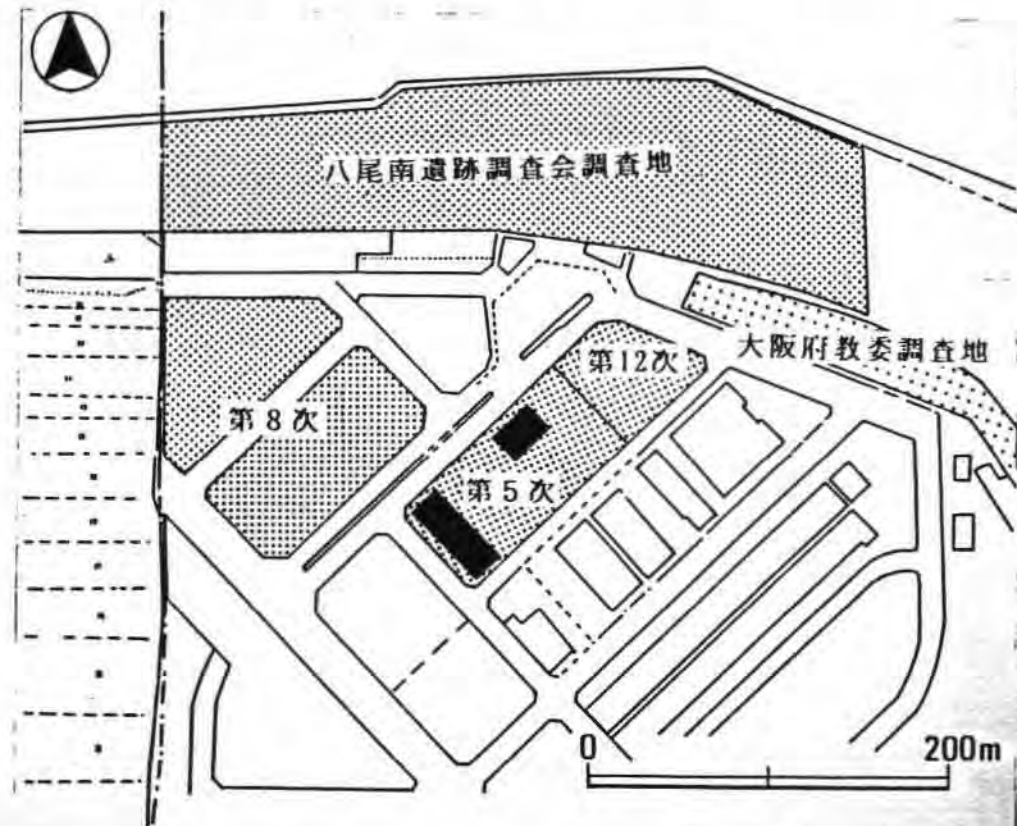
2 これまでの調査

八尾南遺跡では、昭和53年から54年にかけて八尾南遺跡調査会が実施した地下鉄谷町線の延長と八尾南駅駅舎の建設に伴う発掘調査以後も、周辺の開発に伴い10数ヶ所の調査がおこなわれており、多くの貴重な遺構・遺物等が検出されています。

今回の調査地の近くでも、八尾市文化財調査研究会が発掘調査を実施しており、西側に第8次、北側に第12次の調査地が隣接しています。また、今回の調査地のある敷地内では、以前に第5次の調査がおこなわれています。

なお、各調査地では、次のような遺構・遺物が検出されています。

- 第5次調査：弥生前期のしがらみ遺構、弥生後期の水田。当遺跡における古墳前期の集落域の南端を確認。
- 第8次調査：弥生後期の方形周溝墓1基、古墳中期中葉の掘立柱建物9棟、井戸より木製の鞍（馬具）が出土。古墳中期末～後期初頭の古墳（方墳）3基。うち2基の古墳から埴輪が出土。
- 第12次調査：弥生後期の水田、古墳前期の溝。



3 今回の調査成果

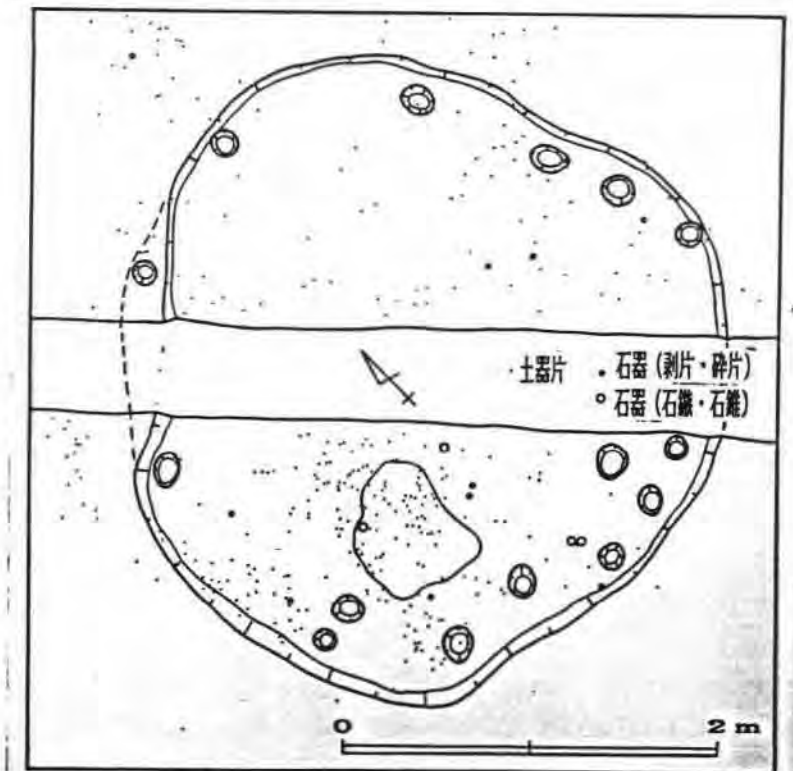
今回の調査では、縄文時代後期（約3200年前）、弥生時代前期（約2300年前）、弥生時代後期～古墳時代後期（約1700年～1300年前）の遺構・遺物を検出しました。それぞれの検出面は概ね右の図に示したようになっています。以下、各検出面の主要な遺構と遺物について紹介することにしましょう。

縄文時代後期

調査区土層模式図

住居跡 SB301：直径3 m前後の楕円形の平面プランをもち、断面は深さ10 cmほどの浅い皿状になっています。床面の周囲には、柱穴とみられる小穴が浅く掘り込まれており、これに木材を据えて円錐形に組み上げて屋根を葺いていたと考えられます。また、床面の中央から南寄りに炭混じりの土が残る浅い落ち込みがあり、火を焚いていた痕跡（炉跡）と考えられます。

遺物は、多量の土器片とともにサヌカイト製の石鏃、石錐、削器等の道具や剥片、碎片も下の図のような分布状況で出土しています。



弥生時代前期

自然河道 NR201：調査区の西半を横切るように蛇行して、南から北へと流れる川です。上面の最大幅が約12m、深さは最深部で約1.5mあります。川底から厚さ60cmにわたって自然木や木の実などの植物遺体を含む砂が堆積しており、その中からたくさんの土器片やサヌカイト製の石器（石核、剥片など）が出土しました。

出土した土器には、弥生前期の前半期でも古い段階の壺・甕などがあり、完全な形に近いものも数点含まれています。また、これらの土器のなかには 北部九州において縄文晩期終末の土器を伴う板付Ⅰ式土器と同形態の「最古の弥生土器」と言える壺が含まれています。

ほかにも、わずかですが縄文晩期末葉の長原式の土器片も同じ砂の層から出土しています。

溝状遺構 SD201：自然河道 NR201よりのびる幅1.5m、深さ約25cmの浅い溝です。遺物はまったく出土していません。埋土の堆積状況等から人為的に掘り込まれた溝とは考え難く、河道の氾濫などの自然の作用によるものと考えられます。

小穴群 SP201～215：直径30cmほどの円形の小穴を15基検出しました。どの穴も深さは20cm前後でした。一部、小規模な建物を構成する可能性のあるものがあります。

少量の土器片が出土していますが、形のわかるものはありませんでした。

弥生後期～古墳後期

方形周溝状遺構 SD101および SD102・103：いずれも遺物は少量の土器片が出土しただけで時期は不明ですが、方形に巡る溝の形態や、これまでの周辺の調査の成果から考えると

方形周溝墓か古墳の周溝の一辺であると思われます。

溝状遺構 SD104：須恵器、土師器などの土器片や形象埴輪を含む埴輪片が出土しており、5世紀後葉の時期が考えられます。

掘立柱建物遺構 SB101：柱間寸法1.6m前後の等間隔に並び、梁間三間以上の建物の一部と考えられます。各柱穴はいずれも一辺50cmほどの隅丸方形の掘方を持ち、柱痕跡は約20cmの円形で、深さは約40cmです。

掘方内より須恵器の破片が出土しており、6世紀後葉～7世紀初頭の時期の建物と思われます。

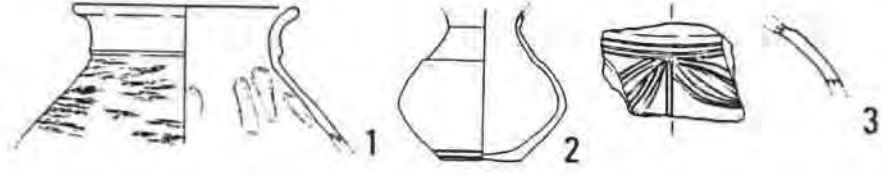
4 まとめ

今回の調査では、自然河道よりコンテナにして約10箱分の弥生前期前半の土器が出土しました。これらの土器は弥生前期を3段階（古・中・新）に区分したうちの古・中段階のものがほとんどで、新段階の土器はまったく含まれていません。前期の土器がこれほど多く出土したのは、中河内では、中段階を中心とする八尾市山賀遺跡出土例に継ぐものですが、八尾南遺跡出土の土器群はそれより内容的に古いものです。

また、「最古の弥生土器」と言える古段階の無紋の壺形土器の完形に近い形での出土は、大阪府下でもほとんど前例の無いほど貴重な例です。

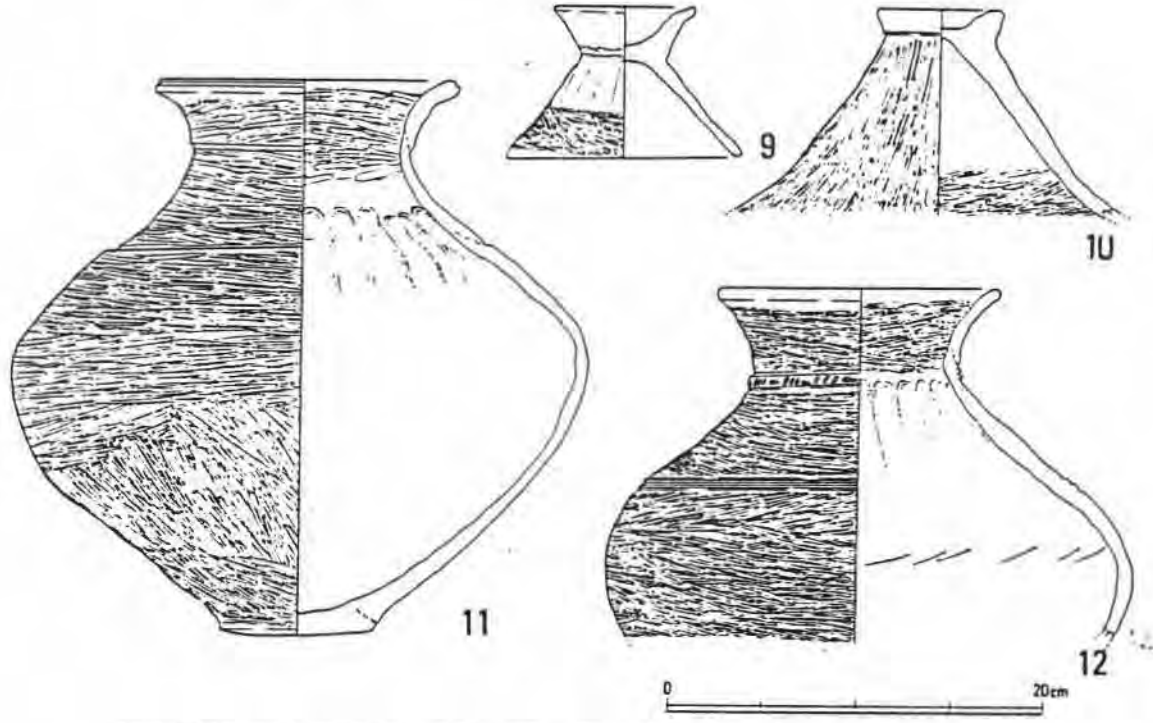
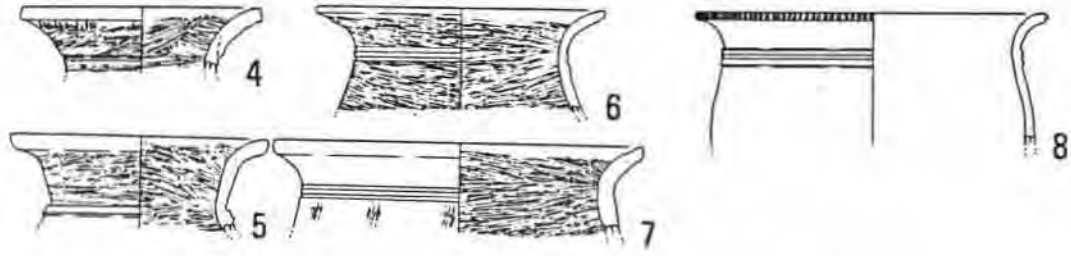
これらの土器の出土は、河内潟沿岸の遺跡立地などの当時の地理的条件から推定できる、中河内地域の弥生文化受容の先進性を裏付ける資料となるものです。

ほかに、特筆すべき遺構に縄文後期の住居跡があります。住居の構造は柱穴の並びなどの平面形態から、小規模なテント状の簡単なものであったと推察されます。また、サヌカイトの剥片、碎片の出土のほか、周辺で石鏃の未成品や台石とみられる石材も検出されていることから住居のそばで石器の製作をおこなっていたのでしょう。当調査地の北方で、現在大阪府教育委員会が調査中の地点でも同時期の土器が出土しており、ともに当時の集落域を推定できる資料となる貴重な発見と言えます。なお、隣接する大阪市長原遺跡でも後・晩期の住居跡が検出されています。



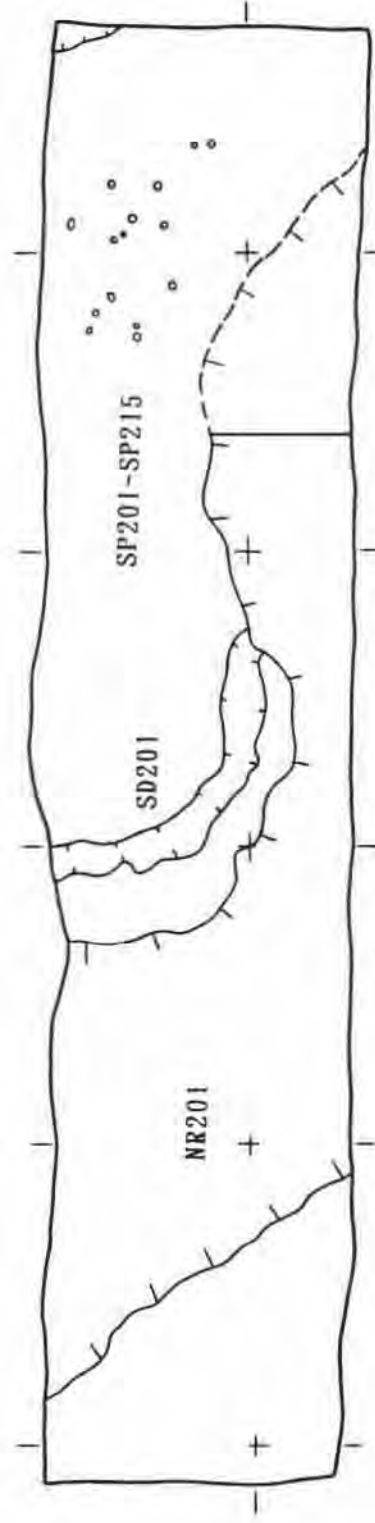
0 10cm

第5次調査区出土土器

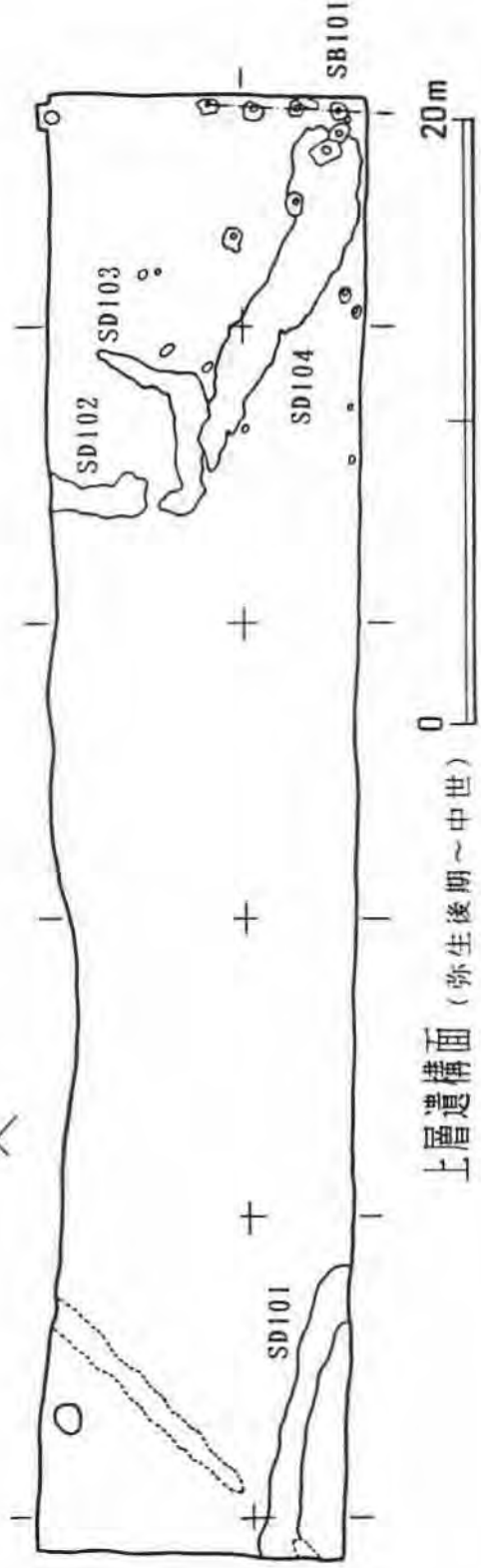


0 20cm

自然河道NR201出土土器



中層遺構面 (彌生前期)



上層遺構面 (彌生後期~中世)

20m

0